夜更けのまいご――あるいはWonderland in Alice

北澤憲昭

いかにぞや、汝ちゝにくまれたるか、母にうとまれたるか。
父はなんぢを悪ムにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。

――芭蕉『野ざらし紀行』

夏の終わり。駅前で遅い夕食を済ませての帰り道、ネクタイをゆるめ、散歩気分でコンビニにむかって歩いていると、暗がりから声をかけられた。

――あの……と言ったように聞こえた。おさない声だった。目を凝らすと、路地の曲がり角で、幼稚園児くらいの女の子がパジャマ姿で、こちらを窺うように見つめている。

――どうしたの？

――まいごになりました。

「まいご」と聞いて、一瞬、心が引くのを覚えたが、気をとりなおして近寄ってみると、遠い街灯の光に少女の顔が白々と浮かび上がった。風呂上がりとみえて、髪は湿っている。淡い黄色地のパジャマには花の散らし模様。心なしか湯上がりの皮膚の匂いが鼻先にただよう。

前かがみになって、こう問いかけた。

——おかあさんと出かけたの？　それとも、おとうさんと、はぐれたのかな？

——おとうさんはいません。死んじゃいました。

まずいことをきいてしまったと、少しどぎまぎしながら「住所は言えるかい」と、かさねて問いかけると、「わかりません」と答えたなり俯いてしまった。俯いたまま足もとのアスファルトを小刻みに蹴っている。大きすぎるサンダルの先から爪先が青白く見え隠れしている。

さて、どうしたものか。親が探しに戻るのをいっしょに待つか。しかし、パジャマ姿のまいごとは、いったいどういうことだろう。煙草でも買いに出た親について来て、はぐれたのだろうか。そうだとすれば、近くに家があるはずだ。家の場所くらいわかりそうなものだが……疑念が次々と頭をかすめる。なにか事情があるらしい。

警察に届けるべきかなどと考えながら、途方に暮れてあたりを見まわすと、ブロック塀のつづく深い路地の半ばに新聞の販売店があって、明かりがともっている。近隣の家族ならば、何か手がかりが得られるかもしれない。そう思って、少女に提案をした。

——そこの新聞屋さんに行ってみないか。

彼女はおもてを伏せたまま首を横にふる。

——きみのおうちが分かるかもしれないよ。

——でも、はたらいているジャマになるからだめなの。

この応答に、ぼくは、「まいご」が作り話であると直観した。新聞販売所に遊びに行って邪魔にされた経験があるのにちがいない。そう確信したぼくは、いやがる少女をなだめすかして販売所まで何とか連れて行った。彼女は大きなツッカケを引きずりながら、ぼくのうしろに隠れるようにしてついてきた。

思ったとおり販売員たちは彼女と顔見知りだった。チラシを整理していたアルバイト学生らしい男に事情を話す

と、少女に一瞥をくれて、すぐ横手のアパートに住んでいる子だと教えてくれた。そう答えたなり、彼は自分の作業にもどり、二度とこちらを見ようともしない。

——さあ、おうちに帰ろう。

うながしたが、少女はその場を動こうとしない。無反応を決め込んでいる。「おうちのひとが心配してるよ」と畳みかけると、「いやだ」と首を振る。茶色味を帯びた髪が、販売店から漏れる電灯の光に輝いて揺れた。

しかたなく、いったん路地の角までもどり、ふたたび少女と向かい合った。嘘のばれてしまった彼女は、ぼくをまともに見ようとしない。夜の大気の底で、かたくなに足元を見つめている。

家に居られない事情があるから嘘をついたのだとすれば、このまま無理に連れてゆくわけにはいかない。しかし、夜更けの道ばたで、いつまでも小さな女の子の相手をしているわけにもいかない。なにしろ物騒な世の中だから、誘拐犯とまちがえられかねない。だが、物騒な世であればこそ小さな子を夜道に放っておくわけにはいかない。

——おばあちゃんか誰か、おうちにいないの？

——……

——おかあさんは？

——いない。

ぼくは、困り果ててしまった。少女の言葉を、もう鵜呑みにすることはできないが、頭から否定してかかる気にもなれない。ぼくは、あきらめ気味に切り札を持ち出した。

——ひとりで帰れるかい？

少女は何も答えず、顔をあげようともしない。その態度は、あくまでもかたくなだった。うっすらと茶色味を帯びた少女の髪を見下ろしながら、富士川のほとりで捨て子に遭遇した芭蕉のことを、ぼくは思いだしていた。「唯

是天にして、汝が性のつたなきをなけ」という言葉が、あたまのなかで電光掲示板のように点滅して、消えた。どうやらぼくは少し苛立ちはじめていたらしい。思わず語気が強くなった。

——でも、おうちに帰らなきゃ。いつまでも、ここにいるわけにはいかないだろ。もうベッドに入る時間だし。

そのとき、彼女の態度に変化が起こった。頭を振り上げ、目にいっぱい涙をためて「うちには誰もいないよ、ひとりはいやだよ」と叫んだのだ。

——ひとりは、こわいよ。

彼女は、ぼくを見上げて、訴えかけるように言った。路地の闇だまりへ吸い込まれてゆく背後のブロック塀が、かすかに湾曲しながら、路側へわずかに傾いている。

こうなったら、ゆっくり事情をきいてみるほかない。そのあとで、どうするか決めればいい。ぼくは腰を落として、少女のうるむ目をみつめた。それは、まちがいなく、ひとりぼっちの「まいご」の目だった。

——わかった。それじゃ、ぼくと、しばらく話をしよう。

ふたりで塀にもたれて空を見上げた。空に月はなかった。シャツをまくり上げた腕に、パジャマの布地が微かにふれる。夜更けの通行人が、けげんそうにぼくらを見て通りすぎてゆく。夜風は、すでに秋気を含んでいた。ぼくは幼いストレイ・シープをかばうような気持だったが、自分自身もまたストレイ・シープの気分だった。

——アリスのお話を知ってるかい？

——……

——不思議の国に行ったアリスの話だよ。

なぜ、アリスのことなど話し始めてしまったのだろう。ぼくは、少女の身の上を聞くつもりではなかったのか。それが、なんで、いきなりアリスなんだ。「シンデレラ」だっていいはずじゃないか。もしかしたら、その方が、

よほど気が利いているかもしれない。だいたいアリスでは、あまりにスノッブに過ぎる。いまやアリスは、安っぽいフィギュアになってコンビニに並んでいる。話の長さにしたって、そうだ。アリスの話を終える頃には真夜中になってしまうだろう……しかし、まあ、いいや、こんな小さな子と夜更けの道ばたで話をするなんてことは、めったにあるわけじゃない。ぼくにとっても、この子のにとっても、大切なひとときになれば、それでいい。センチメンタルに開き直った気分で、ぼくは『不思議の国のアリス』のお話を始めた。少女は、神妙に耳を傾けている。

——むかしむかしのイギリスのはなしだよ。イギリスって分かるかな？　英語を喋るひとたちが住んでいる北の国で、クリスマスに食べる鶏のもも肉みたいなかたちをしてるんだ。

少女が笑みを浮かべて、ぼくを見上げる。唇のあいだに、つくりものみたいな白い歯が並んでいるのが見えた。微笑みを返して、ぼくは話をつづける。

——そこにアリスという、ちょうど君くらいの女の子がいた。ある日、その子が土手の草原で、お姉さんと……

ぼくは『不思議の国のアリス』の筋をたどりながら、だんだんと「アリスの不思議な国」にさまよいこんでいくような気がしていた。迷い道に踏み込んでゆく自分を感じていた。

しかし、アリスがDrink me!というラベルの付いた小さな瓶を手にしたあたりで、ぼくらの時間は永久に中断されてしまった。角を曲がろうとした無灯の自転車が、錆びついた音を響かせて急ブレーキをかけたのだ。自転車は若い男女の二人乗りで、ハンドルを握る男が、ブレーキの音とともに頓狂な声を発した。

——あ、すみません。

いったい何が「すみません」なのか。

ぼくは、男の目を見て即座に事態を察した。「まいご」は少女の常習で、男から見れば、ぼくは間抜けな騙され

役でしかないのだ。あわれむような好奇の眼差しが、そう語っていた。新聞販売店の男の反応も、これで納得がゆく。荷台にまたがった女の目が、うたぐり深そうにキロリと光った。男とおそろいの黒いポロシャツを着ている。黙ったまま自転車を降りようともしない。

きみが探していたのは、このひとたちかい？——少女に、目でそう問いかけると、彼女は軽くうなずいてみせた。男が死んでしまったはずの父であれ、女が義母であれ実母であれ、ともかく近親者ではあるらしい。

——じゃあね……

ぼくは、男女を無視して少女に挨拶をした。

——おやすみ。

そのとき少女が、どんな表情をしていたか憶えていない。たぶん、顔を合わせなかったのだと思う。「おやすみ」の返事もなく、三人は路地の奥に消えていった。自転車の二人を追いかけるツッカケのぱたぱたいう音が、背中の方で、だんだんと遠のいていった。

まいごから解放されたぼくは、コンビニで、朝食のために洋梨の缶詰を買ってマンションの部屋に戻った。しんとした部屋のなかに、ひとり冷蔵庫だけが息づいている。缶詰の入ったビニル袋を手にしたままソファに身を沈めると、疲労感が急速に広がりはじめた。壁の時計は、すでに十二時を回っていた。